研究レポート No.103
発行　平成１２年６月
岩手県農業研究センター

平成１２年度病害虫防除基準に採用した主な殺虫剤･殺菌剤

平成１２年度岩手県病害虫防除基準に新規に採用した殺菌剤と殺虫剤のなかで、代表的な農薬の特徴と使用上の留意点について紹介する。

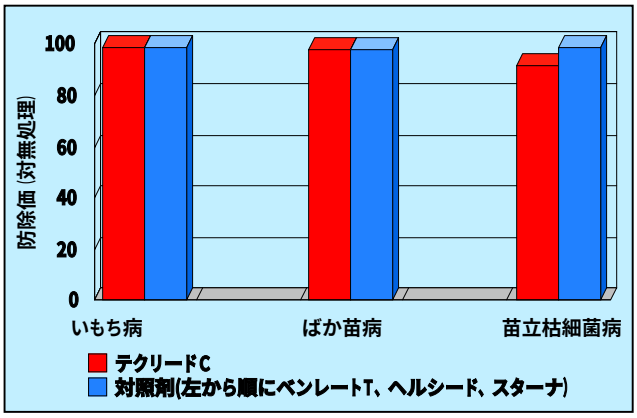

図１　種子消毒による防除試験（Ｈ３　岩手農試）

イプコナゾール･銅水和剤（テクリードＣ水和剤）

200 倍液 24 時間浸漬による水稲種子消毒は、糸状菌や細菌病の同時防除が可能である。また、ベノミル耐性ばか苗病菌にも有効である。薬剤の付着性や浸透性に優れ、風乾作業が省略できる。

薬害（根上がり）が生じる銅の付着量は、乾籾１ｋｇあたり約 120mg であるが、200 倍液 24 時間処理であればこの値を越えることはないので、薬害を生じる心配はない（平成１０年度研究成果）。

ピメトロジン水和剤（チェス水和剤）

3,000 倍液散布によるアブラムシ類の防除効果は、アブラムシ専用剤と同等以上の密度抑制効果がある。

既存剤とは異なる作用（アブラムシ類を餓死させる）のため、ピレスロイド抵抗性のワタアブラムシにも有効である。

アブラムシ類の他コナジラミ類にも有効であるが、有用昆虫（マルハナバチ）や天敵類には影響がないので、施設果菜類で有効に使用できる。

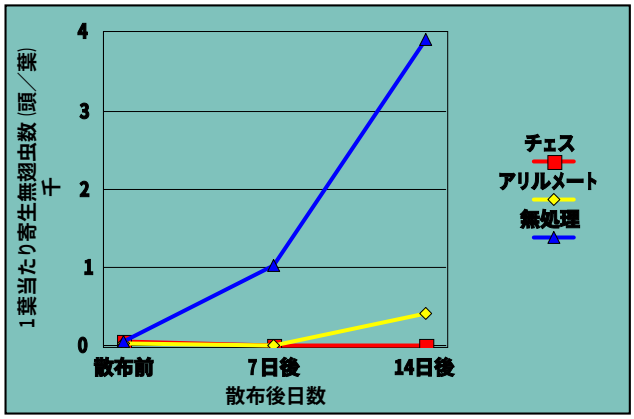

図２　ワタアブラムシに対する防除効果（Ｈ５　岩手園試）

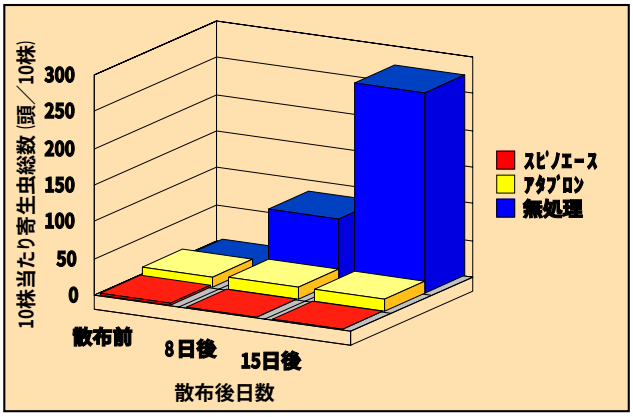

図３　コナガに対する防除効果（Ｈ１０　岩手農研）

スピノシン水和剤（スピノエース顆粒水和剤）

5,000 倍液散布によるキャベツのコナガ防除効果は、２週間以上の密度抑制効果がある。

有効成分は土壌細菌が産成する自然界由来の新規化合物であり、既存剤とは異系統なので、抵抗性コナガの防除にローテーション使用できる。

ヨトウガ若齢幼虫に対しても有効であるが、中齢以上になると効果がやや劣るので、散布時期はヨトウガ成虫発生初期までとする。

担当研究室　生産環境部　病害虫研究室
〒024-0003　北上市成田２０－１　TEL．0197-68-4424　FAX．0197-71-1085